

気仙沼への小旅行

佐藤祐菜・加藤明

バスに揺られること約二時間半、私たちは仙台駅から気仙沼駅に到着した。タクシーでの道中、豊かな田舎の風景を楽しむ。気仙沼の青い海に白い船が目眩しく映る。運転手さんが平らな土地を指さして教えてくれた。「ここは元々建物があった場所なんですよ。」

東日本大震災の被害が大きかった気仙沼。震災後、この地で、自らの手で野菜を育て、その放射能値を測り、安全を確かめた上で調理したお弁当を販売している団体があるという。私たちは2014年8月31日、その団体VOAR LUZの代表である佐藤春佳さんにインタビューをした。

取材は魚介類やお菓子など気仙沼の名物が販売されている「海の市、シャークミュージアム」で行われた。佐藤さんは、緊張する私たちを優しく迎えた。素朴でかわいらしい印象の方だ。4歳の息子さんと一緒に、自分で作ったお弁当を地元の人に販売しながら、質問に答えてくれた。

「自分に何ができるだろうと考えたんです。」

役者を目指していたという佐藤さんは、明るくよどみない声で話し始めた。彼女は東京で一人暮らしをしていたが、2011年震災当時、出産のために実家のある気仙沼に帰っていたのだという。原発事故による放射能への不安、とりわけ食の安全性への不安は子を持つ母として大きかった。そんなときに彼女は思い立ったのだ。どれが放射能に汚染されていない安全な食べ物かが分からないのであれば、すべて自分で行うことでリスクを減らそう、と。

しかし、きっかけは震災であったが、VOAR LUZの可能性はそれだけでは終わらない。地産地消——インタビューの間、彼女の口からはこの言葉が繰り返された。佐藤さんが行っている新鮮なお弁当作りは、その地で作られたものを、その地の人々が食すというもの。安全で安心だ。VOAR LUZは、都会では失われつつあるこの地産地消の仕組みをもう一度見直し、気仙沼から全国へ発信しようとしている。そう目標を語る彼女の表情からは、未来への前向きな姿勢が感じられた。

佐藤さんは続けて言った。「被災地だからと、変に肩肘をはって勉強してから来ようと難しく考えるのではなく、ただ一度遊びに来てほしい。」

無理に気張らなくてもいいのだ。ただ気仙沼の自然や食、そして人との交流を楽しむ。その上でその土地の良さを、SNSなどを通して発信していく。こうしてまた人々が気仙沼

を訪れて、情報を発信、共有することで気仙沼の復興も前進していくのだろう。

彼女へのインタビューを通して、「被災地」をキーワードに気仙沼を訪れていた私たちには、気づかされたことがある。確かに震災の傷跡は気仙沼のあちこちで垣間見える。しかし、この地の時間は3.11のときで止まっている訳ではない。気仙沼の人々はしっかり前を向いて日々を送っている。

気仙沼での数時間の滞在を終えて、私たちは気仙沼駅から電車に乗って仙台駅に向かった。車内ではおばあさんと若者が向かい合って座り楽しそうに談笑している。車窓から覗く田園風景を見ながら、私たちは佐藤さんのお弁当を開いた。初めてみるサメのお肉。味わって食べると、心なしか優しい味がした。

【編集後記】

最近はなかなか自然と触れ合う時間が取れずにいましたが、気仙沼では自然そしてそれをもつエネルギーを感じることができました。そんな美しい自然があつた災害をもたらしたのだと思うと残酷なことだ…と思いましたが、気仙沼の人々はそれを知った上で、佐藤さんの様に前向きな姿勢で自然と共に生きていくことを選んだと分かりました。私はその姿に胸を打たれました。

加藤明

気仙沼への取材は、わたしにとって思った以上に貴重な体験になりました。気仙沼のゆったりとした時間と自然豊かな風景、人々の優しさを前に、いかに自分が都会の生活に慣れているか気づかされました。その素敵な魅力を味わいに、ぜひ皆さんも気仙沼を訪れてみてください。

佐藤祐菜